鎌倉以降の日本庭園は水墨画の影響を受けた

雪舟作と言われている常栄寺庭園と雪舟を中心とした水墨画との関係性を検証すると、相当の相関性が見られる。

1･1 雪舟作と思われる常栄寺庭園の基本構造

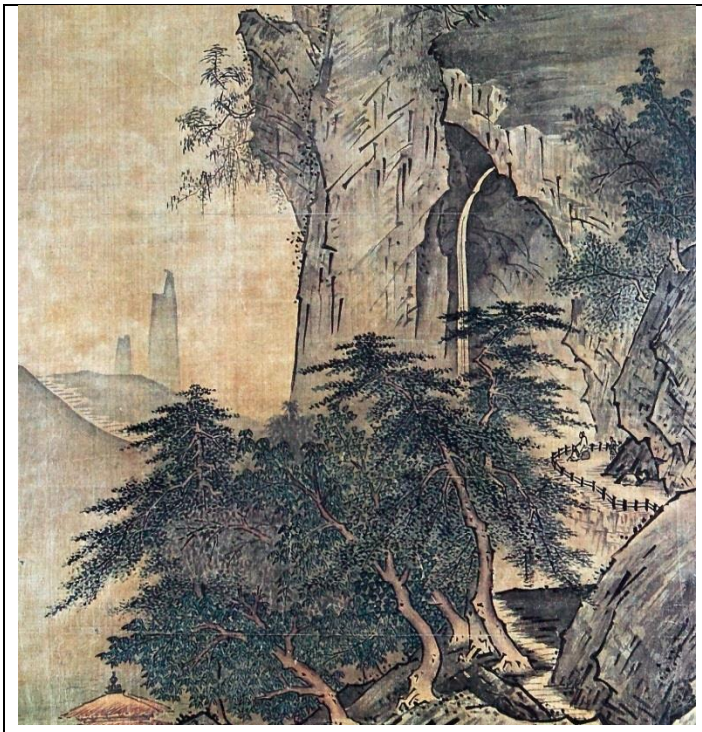
①基本構成：このアングルで見ると近景が遠近法効果を生む石組で、中景には異形の石があるが、これは水墨画のオーバーハングの石を象徴している。遠景の山畔の石組は水墨画の煙霧に煙る重畳たる山並みに見える。まさに水墨画の 3 次元化だ。

②ライオンのような（オーバーハング）石：中景に日本庭園の石としては奇形ともいえる石があるが水墨画では標準的な構図

③本堂から見ると山畔にアイストップの石組みは洗耳渓に消えるように見えなくなり、不思議な造形に思える。

1・2　雪舟・狩野正信・相阿弥の水墨画の例

水墨画にて以下の３項目で庭園との対応関係性を見る　①基本構造　②ライオンのような石（オーバーハング）　③途切れ途切れの山道

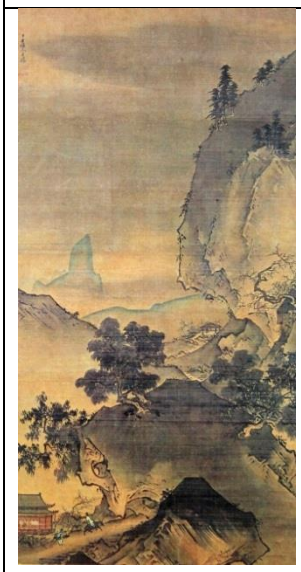


雪舟筆「四季山水図」(夏)ブリジストン美術館　重文　全四幅
出典）日本美術絵画全集 第四巻 雪舟　集英社

雪舟筆「山水図」牧松・了菴賛　国宝　　出典は同左
最晩年の遺作と言われているが直交する構図は斬新だ。

①水墨画の基本構造

雪舟の水墨画の基本構造は近景を大きくして遠近法効果をだし、中景にはオーバーハングの巌を置き景色にメリハリをつけ、遠景には煙霧に霞む山並みを小さく描き奥行きを出している。なお画中には延々と続く山道があり歩いている高士や、観瀑の高士がいる。これらを描くことで、単なる自然の山水ではなく親しみのある絵画になる。



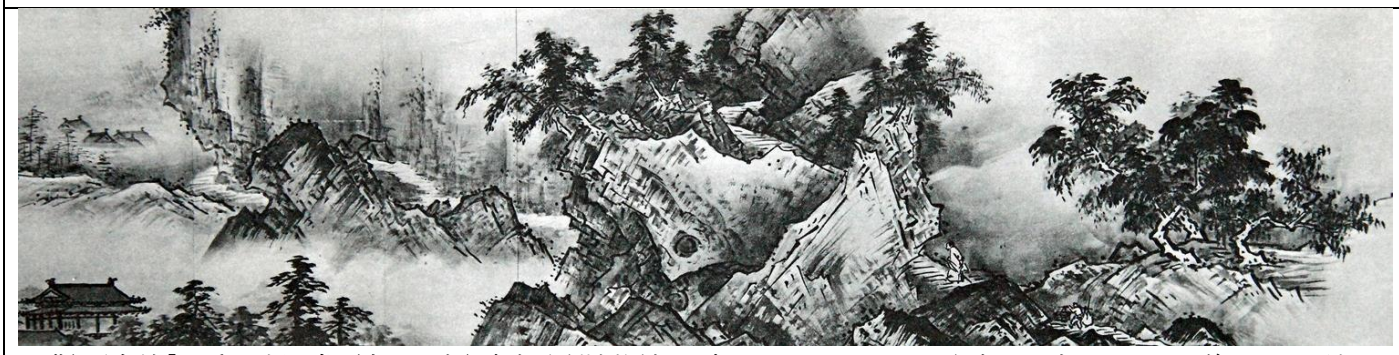
雪舟「四季山水図」(春)東博

雪舟「山水図」龍崗真圭賛

狩野正信・蕭湘八景図・東海庵

相阿弥(鑑岳)・山水図屏風・左隻・メトロポリタン

②ライオンのような石：水墨画では中景にライオンのような(オーバーハング)石がある。常栄寺の奇形な石に対応する。



出典）雪舟筆「四季山水図巻」(春の一部)防府毛利博物館-国宝　　↑高士が歩いている山道は延々と続く

③途切れ々の山道：雪舟・水墨画左端の消え入るような山道が随所に描かれているが、常栄寺山畔石組みに対応する。

2 日本庭園の水墨画的要素

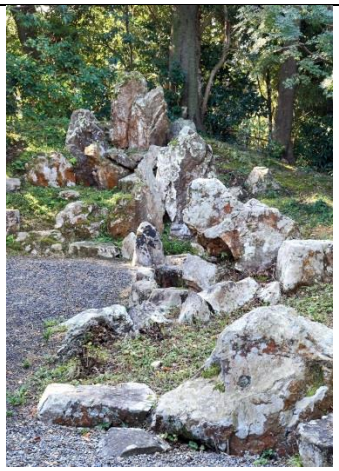
2・1　オーバーハングの石の例(上記雪舟庭園を含む)

2・1・① 庭園の例

常栄寺：中心線とアングルを低くして鑑賞する

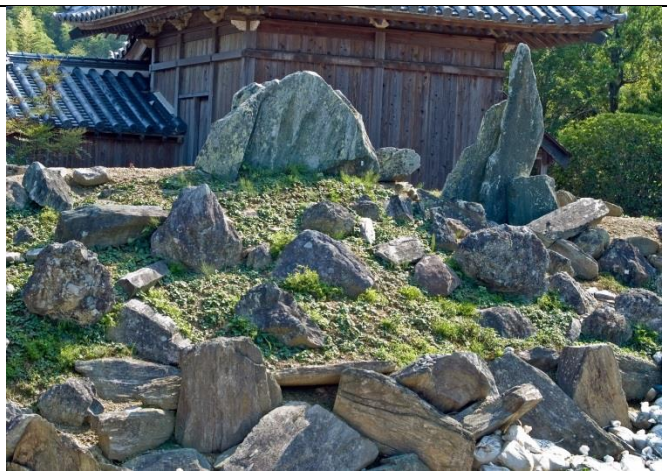
常栄寺のオーバーハングの石をアップする

福田寺：名刹としてのプロデューサーンも存在が



同左：上段の間からのライオンのような石の景は、まさに一幅の水墨画だ

阿波国分寺：枯滝上部の立石



同左：築山頂部の景

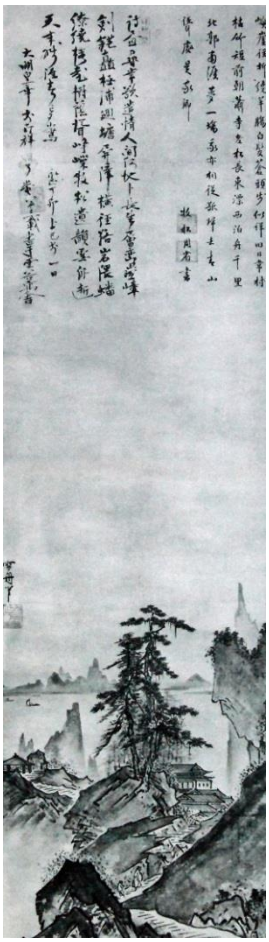
西禅院：重森三玲作品の中央部の名号石は水墨画そのもの

同左：オーバーハングの石、富士山型の蓬莱山、ペンギン

2・1・②水墨画の例

水墨画の例は枚挙にいとまがない。と云うよりは総ての水墨画はオーバーハングの山・厳を入れて描かれている、ともいえる。

雪舟「山水図」・龍崗真圭
出典）『日本美術絵画全集』
第四巻 雪舟 集英社



雪舟「山水図」・牧松了菴賛・国宝
出典日本美術絵画全集
第四巻 雪舟 集英社

雪舟「四季山水図」（春） 東博
出典）『日本美術絵画全集』
第四巻 雪舟 集英社

伝天章周文「山水図」・フリーア美術館
出典）『在外日本の至宝』
毎日新聞

「山水図」・ジャクソンパーク
出典）『在外日本の至宝』
毎日新聞

秀盛「山水図」・ジャクソンパーク 出典）出典）『在外日本の至宝』毎日

雪舟 「四季山水図」（夏）
出典）『日本美術絵画全集 』
第四巻 雪舟 集英社

元信・「蕭湘八景」・重文・東海庵 出典）『日本美術絵画全集』元信 集英社

2・2　牧谿『観音猿鶴図軸』から影響された石組み

2・2・① 庭園の例

碧巌寺：碧巌録の講義をした道場としての庭園

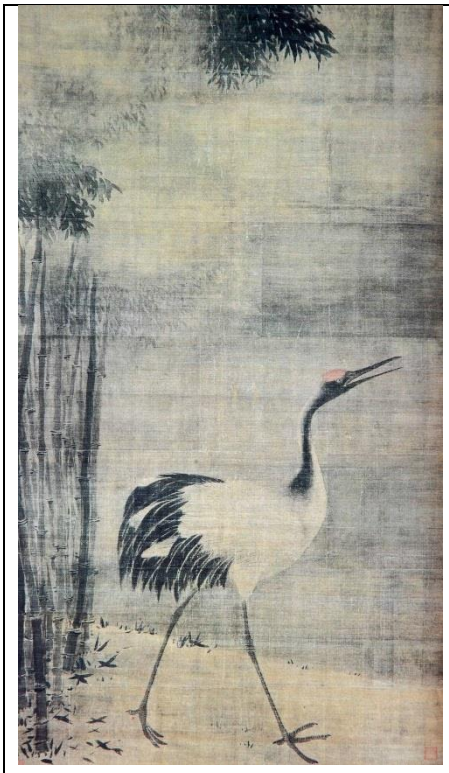
同左：碧巌石の左右には観音石と猿石が配石されている

金閣寺：左より観音石・猿石・碧巌石・鯉魚石

同左：左より観音石・親猿が子を抱いた姿

2・2・② 水墨画と禅宗説話の例（「五灯会元　夾山」より　猿抱子帰青嶂後　鳥啣花落碧巌前）

猿は子を抱いて青嶂(せいしょう)の後(しりえ)に帰り、鳥は花を啣(ふく）んで碧巌の前に落（お）つ　を視覚化した造形



牧谿筆<観音猿鶴図>三幅対、雨後竹林を出一声鳴く鶴、谿岩窟に結跏趺坐す観音、崖上の老樹に遊ぶ母子猿

出典）『日本美術全集』金・宋

2・4　観音図の水墨画から影響を受けた庭園（滝が落ちている岩窟に結跏趺坐した観音）

2・4・① 庭園の例

永保寺：国宝の観音堂の左側には飛瀑泉がある

同左：観音堂の中に土岐川の流木の仏龕に滝を象徴した造形

瑞泉寺：天女洞と滝（右端に滝と水分石があるが、来客時には上部にある天水の堰を切る）。洞窟には観音を祭る。

出典）南宋・金・宋「観音菩薩坐像」南宋・重文・清雲寺
備考）
上記の永保寺の観音像と同じ構図であり、この像が南宋で作られてことから、このような伝統が日本にもたらされたことが解る。

2・4・② 水墨画の例

伝祥敬「白衣観音図」
重文・建長寺・全 32 幅
『日本美術全集』相阿弥 集英社

良全筆・如意輪観音図・
重文・山本家・
『原色日本の美術』小学館・
備考）画面右下に滝が落ちている

赤脚子筆・白衣観音・小林家　『原色日本の美術』小学館

白衣観音図・伝一之・山荘コレクション　出典）『在外日本の至宝』毎日新聞

2・4　石梁瀑布

2・4・①実際の風景・庭園

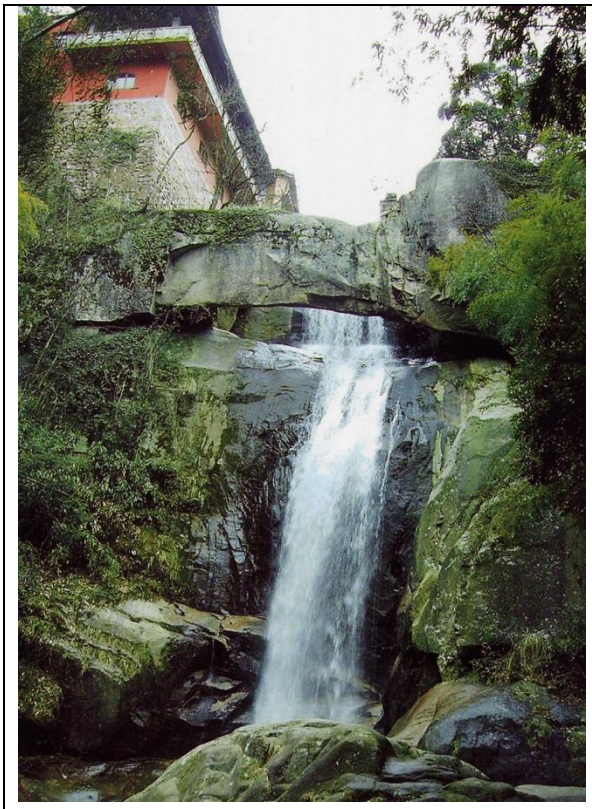
名古屋城二之丸庭園：橋添え石の無く不安定な橋を表現

粉河寺：ダイナミックな石橋ここに極まれり

興臨院:玉澗式の橋は渡るに渡れない危うい橋

楽々園:山から落ちる激流は虚空に架かる石橋をくぐり、水落石の下には奔騰した水泡を表している。

2・4・①実際の風景と水墨画



国清寺の石梁飛瀑

周李常「五百羅漢図軸・「天台石橋図」・南宋 1178 年・『在外日本の至宝』フーリア美術　毎日新聞

玉澗式石橋

天台山一帯は、山・滝・渓谷が織りなす景色が美しく、天台山風景名勝区に指定。その麓にいくつかの寺が散在している。その中心をなすのが、県城から３ｋｍ北にある国清寺。中国天台宗発祥の地として有名で、隋代に智顗(ちぎ)大師の遺志にもとづいて創建された。唐代に最澄は 804 年ここで天台宗を学び、日本に帰って、日本天台宗を興したことでもよく知られ、また道元・栄西ほか多数の僧が入唐・入宋の際に一度はここを訪れた。国清寺から 17ｋｍ奥に入ったところにある石梁瀑布(方広寺という寺がある)。この石梁瀑布こそが玉澗流水墨画の基になった実在の橋と滝である。この滝の上にかかる石橋は細くて長く、非常に不安定な感じがする。しかし修行僧たちは普段どおりに渡っている。

2・5「琴棋書画図」を三次元化した庭園(最も知られている水墨画由来の庭)

2・5・① 日本庭園の例

退蔵院：下記の水墨画を三次元化した庭と思われる。ただし、水墨画では自然の滝であるが、当庭は枯滝。

2・5・② 水墨画の例

伝狩野元信筆：「琴棋書画図(部分)」(霊雲院)は滝前に石橋が架かり、背後に滝が落ちる
なおこの絵の滝は狩野元信筆の「霊雲観桃図」と同様であり、大仙院の庭も元信の設計図によるか。

2・6 大仙院庭園について

2.6・① 庭園の造形

大仙院：水墨画でもかなり具象的な造形の山水図を三次元化した庭園と思われる

2.6・② 大仙院関係の水墨画の例

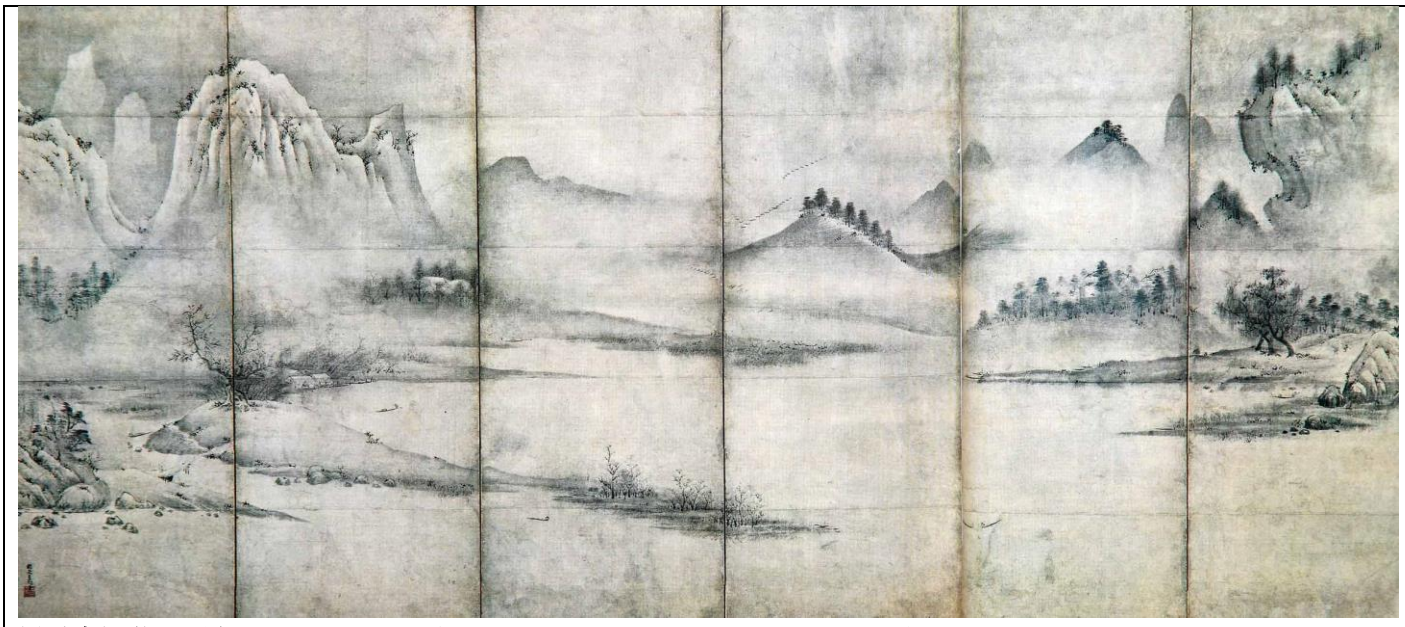
水墨画の中でもかなり具象的な例を下図に示し、次頁には大仙院屏風に関連した、伝相阿弥の水墨画を示した。

元信:「霊雲観桃図」・重文・大仙院・東博

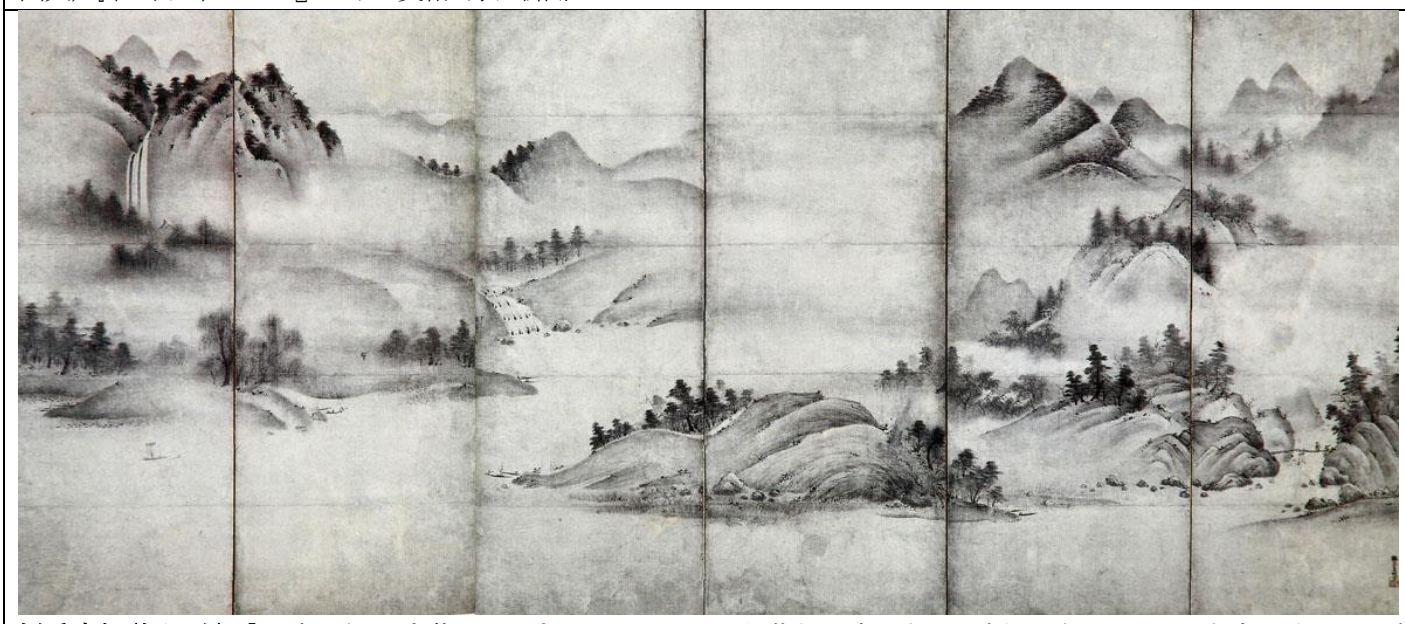
相阿弥:「観瀑図」・サンフランシスコ東洋
出典）『日本美術全集』相阿弥　集英社

芸阿弥：観瀑図・重文・根津美術館
出典）『原色日本の美術』小学館

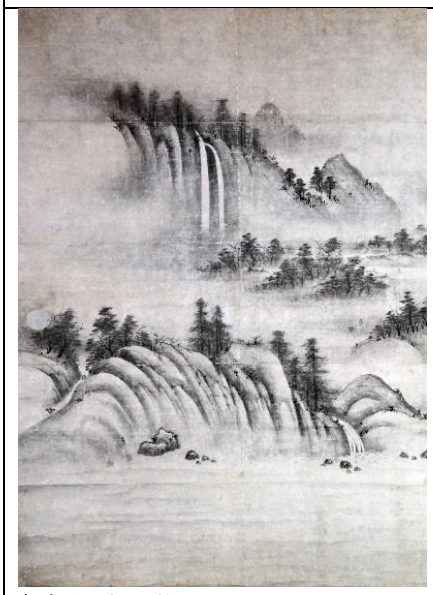
コメント）元信・相阿弥・芸阿弥の観瀑図の滝は大仙院庭のように沸き立つ滝壷と滝の流れが写実的にデザイン化されている。



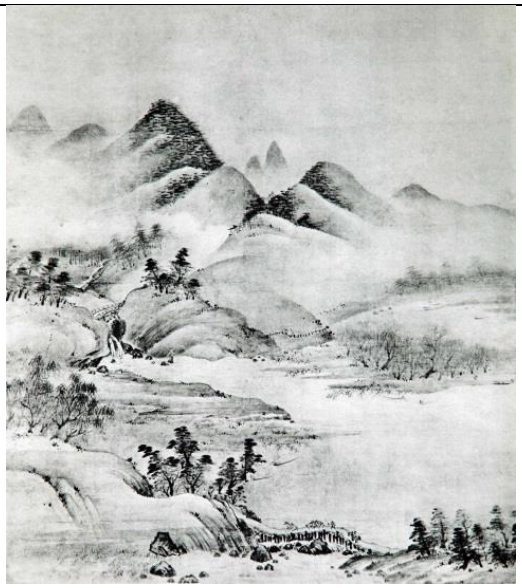
鑑岳真相(相阿弥):「四季山水図」左隻・メトロポリタン(当屏風は大仙院方丈の襖絵の習作か):左側に山が連なるが二つの山が大小ワンセットになっていて、大仙院の不動・観音石の原点か。また右端のライオンのような図像もリアルだ。
出典)『在外日本の至宝』フーリア美術 毎日新聞



鑑岳真相(相阿弥):「四季山水図」右隻・メトロポリタン二つの山から落ちた滝はやがて大河になり、そして左右に分かれて大海ににそそぐ構成は、大仙院庭園に似ている。この屏風の左右に大小ワンセットの山が二つもあり、大仙院の不動・観音石の原点か。出典)『在外日本の至宝』フーリア美術 毎日新聞



伝相阿弥:「蕭湘八景図」・1513 年・重文・大仙院 『日本美術全集』相阿弥 集英社

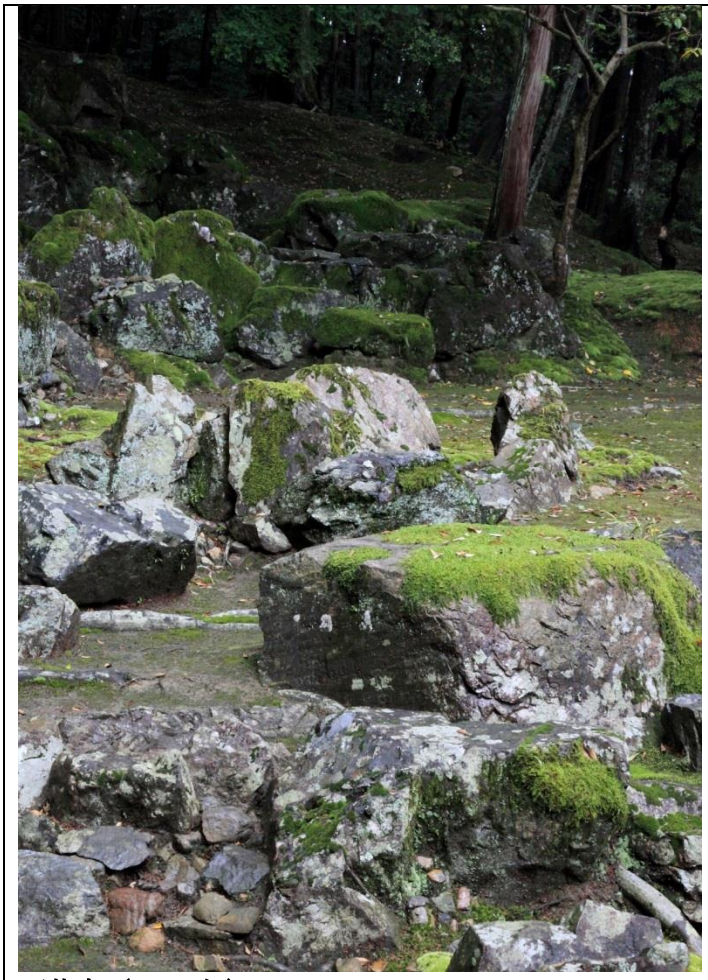


伝相阿弥:「蕭湘八景図」・クリーヴランド美術館
『在外日本の至宝』フーリア美術 毎日新聞

伝相阿弥:「山水図屏風」右隻・妙心寺
出典)『日本美術全集』相阿弥 集英社

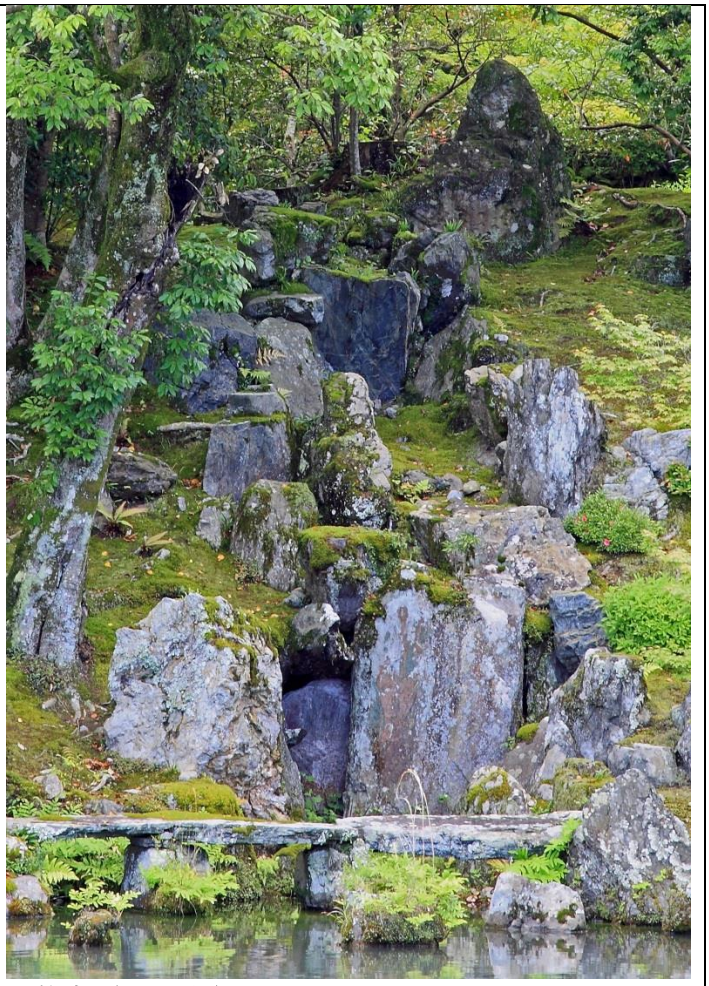
2・6　龍門瀑の造形(最も好まれた禅宗由来のテーマ)

2・6・① 庭園の例



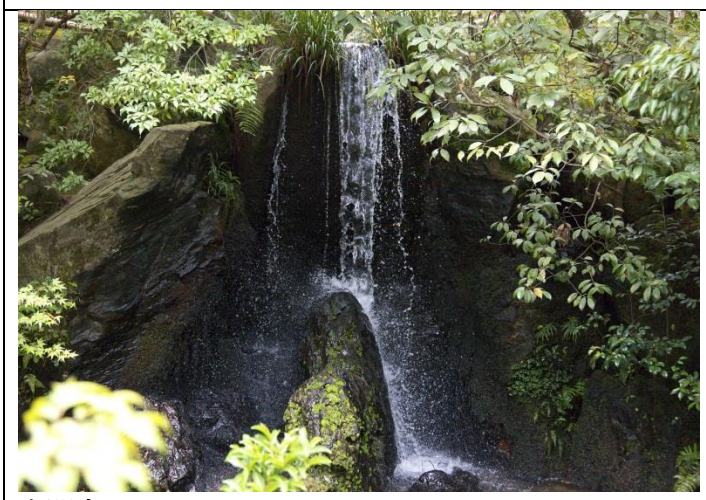
西芳寺（1339 年）：

修業の道場としての形が残る、過渡期的な庭園とも言える。中央に鯉魚石があるが、画面左下の一段目の滝を超えて、画面奥の二段目、三段目の滝に向っている。なお画面右側は一段目の滝ではなく、修行僧が鯉魚石の右側の空地で坐禅するために登る階段である。



天龍寺（1339 年）：龍門瀑

龍門瀑の造形としては最初期のものであるが、山畔を活かした石組みは圧倒的な迫力がある。現代における造園は重機器があるので、このような石組みを見てもさほど感動しないきらいがあるが、この庭は本格的な禅庭園の幕開けに相応しい記念碑と言える。



金閣寺：足利義満が 1397 年に西園寺氏から譲り受け、自らの別荘とした。この時に写真の芦原島を増設し、さらに龍門瀑を作るなどの改造を行って禅の庭にした。当初(1224 年)は西園寺公経の別荘として北山第を営んだ。そのため舟遊式の庭であった。

保国寺(1400 年頃)：立石の効いた造形であるが、二段目と三段目の滝は鋭い稜線の石で、造形がいっぺんに引き締まってくる。その中にあって、中央やや右下に斜めの石があるが、これは鯉魚石と思われる。つまり龍門瀑の造形である。

碧巌寺(1446 年):碧巌録の物語がフルセットで備わった造形の庭。

・護岸の左からの造形:龍尾石、龍の足(護岸左側の水平な石)、龍腹護岸(鯉魚が龍に化身した姿をリアルに象徴)、達磨石(ツツジの中にある肩の丸い石)、碧巌石(左右 に観音石と猿石)、龍門瀑。

・池中にある造形:坐禅石と九山八海石(画像の中央)、鯉魚石がある。

更に驚いたことには、碧巌の前の池中に傾斜した羽状の小石があるが、これは**鳥が碧巌の前を降下する姿**を象徴した造形なのであった。この庭を復元した斉藤忠一氏によると、「この石は偶然に何処からか落下したものではなく、池中の土中深く差し込んであった」とのことである。まさに下記碧巌録を活写したものであった。

「五灯会元　夾山」　より　**猿抱子帰青嶂後　鳥啣花落碧巌前**

猿は子を抱いて青嶂(せいしょう)の後(しりえ)に帰り、鳥は花を啣(ふく)んで碧巌の前に落(お)つ

常栄寺(1470 年頃):雪舟庭園に龍門瀑の造形だ。護岸石組は鯉魚が龍に化身した姿を象徴。

徳島城:上田宗箇作の龍門瀑【鯉魚石(中央左側の黒味の石)・龍頭石(中央右側の傾斜した石)・龍に化身した象徴の龍の玉(中央白石】

2・6・② 説話の内容

省行文と龍門瀑:蘭渓は建長寺の建立に当たり、諸事講式や規矩(きく～規則)を定め、多くの法語を発した。その中に『大覚禅師省行文』がある。雲水や参禅者の日常の心構えを懇切丁寧にといたもので、その中に龍門瀑のことが書いてある。長文であるので、その部分だけを意訳してみる。

曹洞宗の開祖となった洞山和尚は、出家してから一度も故郷に帰らず修行をした。そのくらい熱心に修行すれば、必ず益があって悟りを得ることが出来る。青蘿(青い**つた**)だって喬木の勢いを得て千尋の大木となって聳えることが出来る。**「紅尾(鯉)は禹門の波と競って、争って三級岩を超える」**という。　鯉魚さえも、禹門が切り開いた滝の激流に向かって、争って三段の滝を越えようとする。無情の青蘿だって、自らの意志で高くよじ登ろうとする。鯉魚は滝を登りきって、大空を飛翔しようとする。ましてや人として、雲水は信念を篤くして修行に徹しなければならない。志を堅く持って、悟りを得ることが出来ないなどと決して思い患うな。修行は外に求めるものではない。自ら振り返って、自分のうちに求めるものだ。

2・7　煙霧に霞む山々の造形化

2・7・① 庭園の例

この項では鎌倉時代以降の庭園が、なぜ立体造形が多くなるのかを知るために、その原点としての水墨画との関係を見る。

常栄寺：雪舟作の庭園として最も信頼性の高い庭。背後の山畔にある石組みは1・2頁の視点で見ると納得できる。

保国寺：最も立石の造形が水墨画調の庭

阿波国分寺：本堂脇にあるペンギンのような石

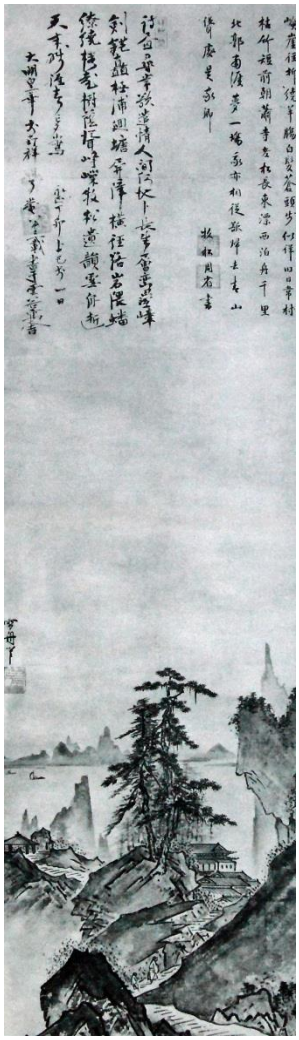
粉河寺：石組背後の林立する石柱は水墨画由来の造形か

2・7・② 水墨画の例

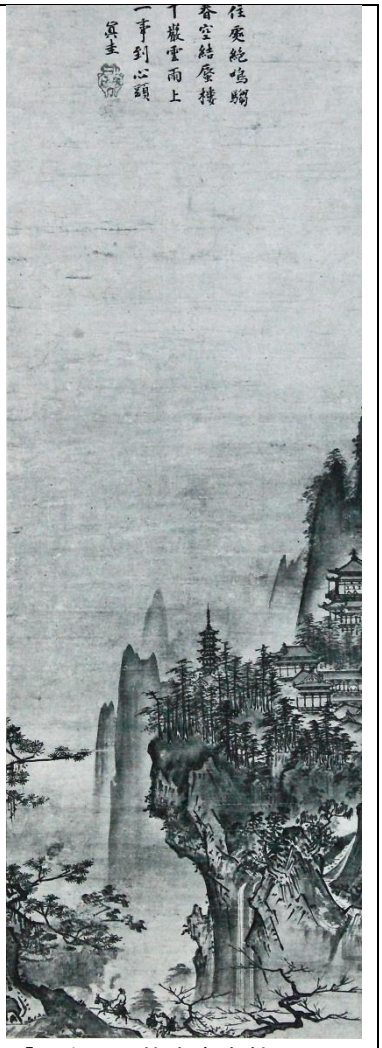
水墨画と言えば山水を主体とした大自然の風景だ。遠景には重畳たる山並みが煙霧に煙っている。大半の水墨画がこの範疇に属する。ここでは雪舟・周文などで検証する。

雪舟：「山水図」牧松・了菴賛　国宝(部分)

雪舟さ晩年の作品。型通りの近景の岩盤・中景にはオーバーハングの巌・そして遠景には煙霧に霞む山並みが見える。注目すべきは山並みの裾にぼかしが無く、松の形と直交していることである。



同左全景:「山水図」牧松・了菴賛-国宝



「山水図」龍崗真圭賛

「蜀山図」重文　静嘉堂

伝天章周文「山水図」・シアトル美術館

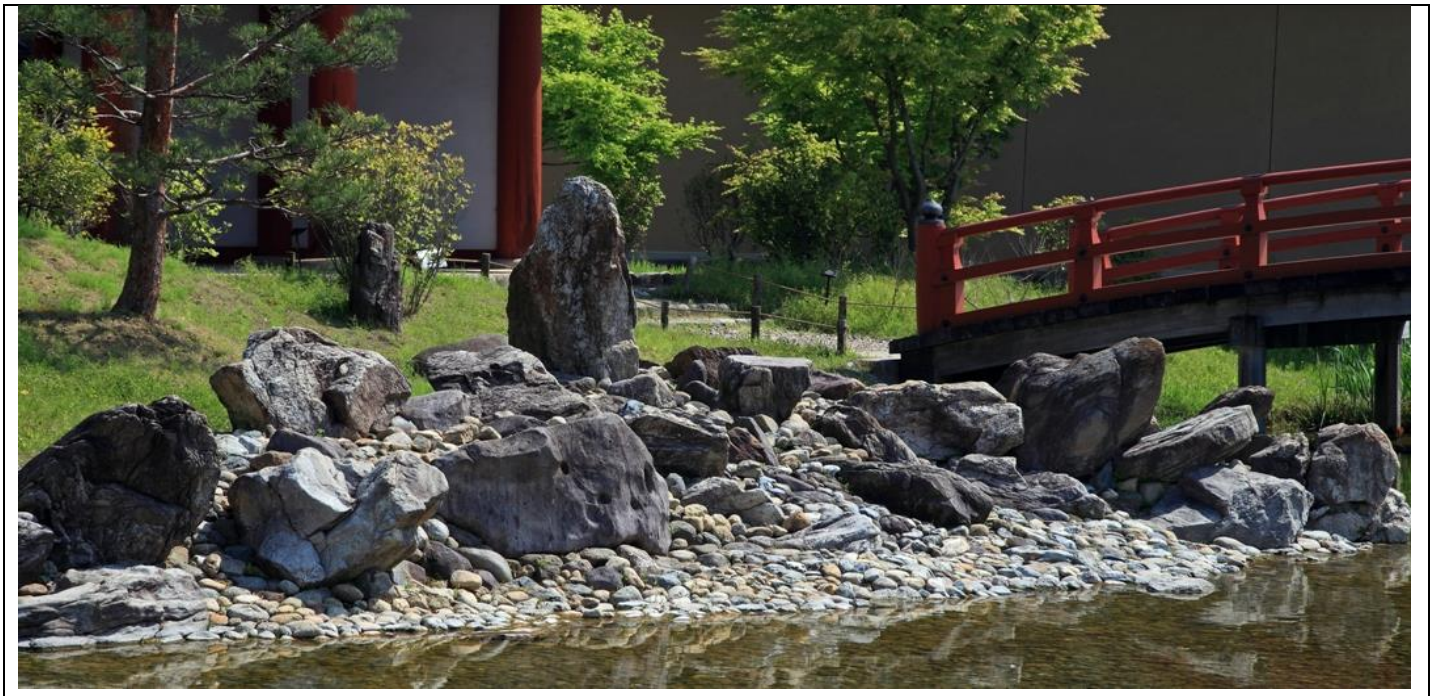
「山水図」

2・8　庭園の立体造形化を検証する

上記2・7までは要素ごとに庭園と水墨画の関係性を見てきたが、ここでは鎌倉時代以降の庭園が急激に立体造形化するが、その原因が水墨画にあるのではとの仮定で、鎌倉時代前後の立体造形性を検証する。

2・8・①奈良～平安時代の庭園

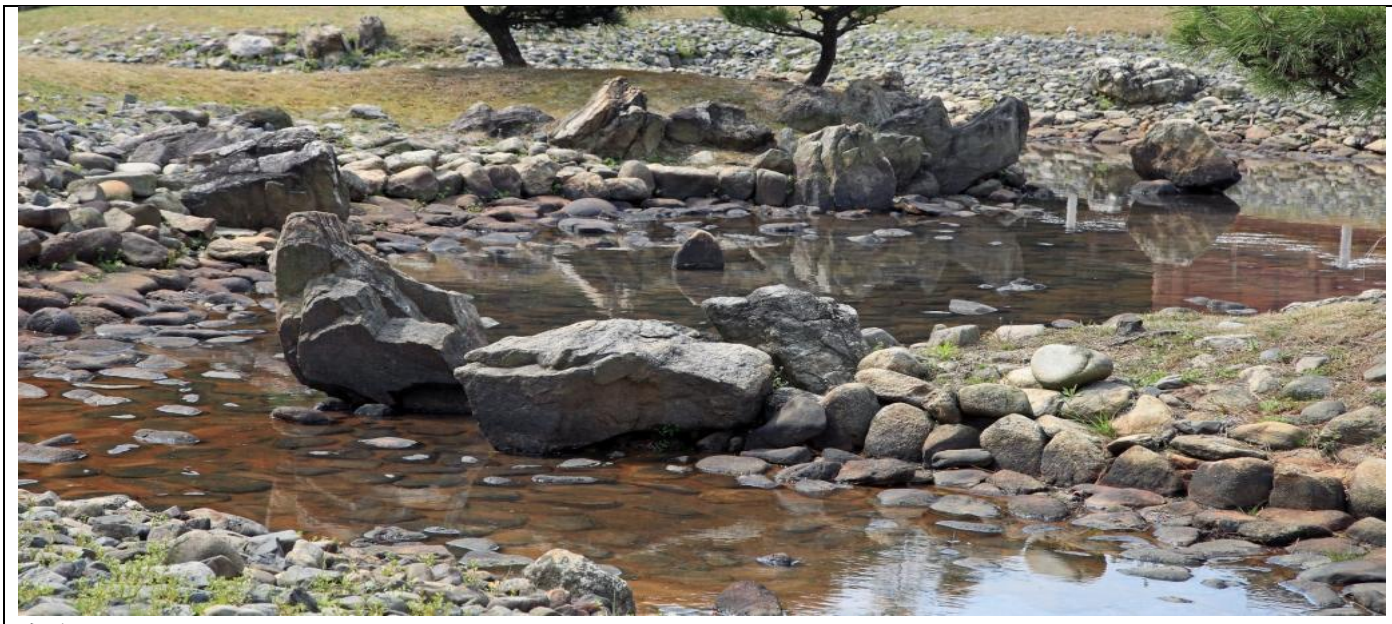
飛鳥時代・奈良時代から日本庭園は造られていた。特に平城京の中にある東院庭園は庭園全体が栗石で覆われ、かつ出入りの多い洲浜の造形は抽象化されている。一方石組みは正殿の背後にあるが、初めての石組みとは思えない程充実した造形である。中心石は須弥山と思われる立石があり立体造形性も素晴らしい。また、宮跡の州浜の先端部の造形や、浄瑠璃寺の荒磯、毛越寺の須弥山石組み、法金剛院の青女の滝などに立石の萌芽がみられる。ただし、これらの庭は総て**池泉庭園の護岸を荘厳する造形のための石組みである。**鎌倉以降の山畔での雛壇状の石組みとは異なり、鎌倉時代以前の石組みは立体造形性が劣ると考えざるを得ない。



東院：正殿の背後は約４０石になる石組みがある。屹立した石は須弥山を象徴していると思われる。

東院：洲浜は形と云い、材料が栗石であることなど桂離宮そっくり。なお、物見灯篭に相当する立石は60ｃｍもある（現在は発掘当時の状態を復元しているが、本来は立っていたと思われる）。

なお、庭園全体を覆う洲浜には、珍しい穴の開いた石や筋目の石などが選択されている。



宮跡：大きく蛇行した凸部にはやや大きな形の整った石が組まれている。

平等院：洲浜には選び抜かれた石が散在する。

同左：散在する石は概ね臥せ石である。

浄瑠璃寺：阿弥陀堂には九体もの阿弥陀様がおられる大寺であるが、多くの石は抜き取られていると思う。幸いにも島の先端には『作庭記』を思わせる石組みが残っている。

毛越寺：出島・岩島になっているが、本来は一体化していた。先端の立石は須弥山を象徴。

毛越寺：この築山石組みは、長大な反り橋脇にあり、対岸の経堂から眺めた。亀島ともいえる。

法金剛院：青女の滝は本来７尺の滝であったが、待賢門院璋子がさらに５尺高くさせた。

同左：護岸の石は概ね臥せ石である。

嵯峨院跡大沢の池：池中に夜泊石・庭湖石

同左：最古の滝と云われる名古曽の滝

現西芳寺（旧西方寺）：中川親秀は西芳寺を浄土宗から禅宗に改めたが、この洲浜は浄土宗時代の痕跡か

現金閣寺（旧北山第）：この亀島と鶴島は西園寺公亘の北山第時代の造形か

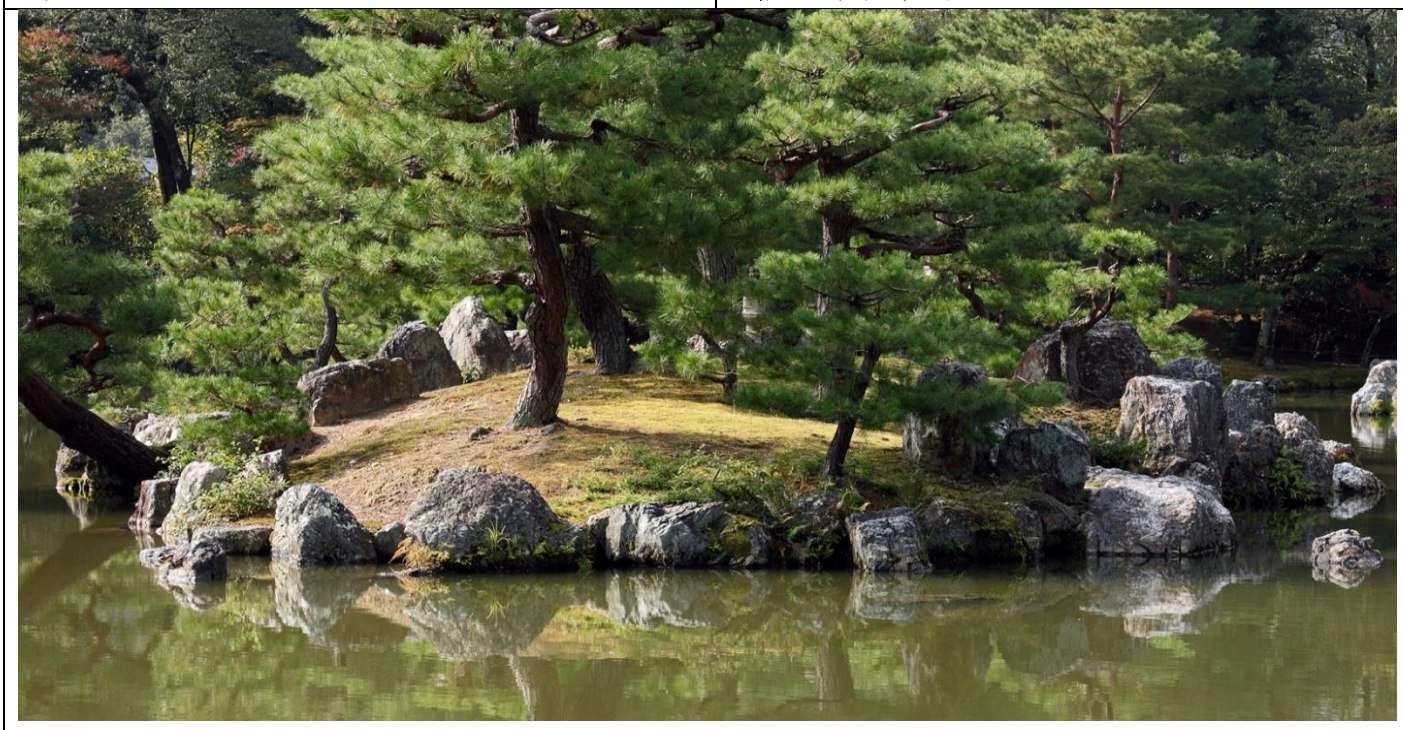
2・8・②鎌倉～現代の庭園

水墨画の影響か峻厳な石を選択して、山畔を雛壇状にして、石を積み上げる石組みをする（石を畳む）。水墨画のように近景・中景・遠景が構成されるようになった。このことにより石の密度は高くなり、石組みは縦にも横にも広がりを持つ。

なお庭園を造る人を「立石僧」と云われたのは、僧侶が庭を作ったからであるが、庭を作るということは、石を立てることであったからである。

西芳寺：龍門瀑石組み

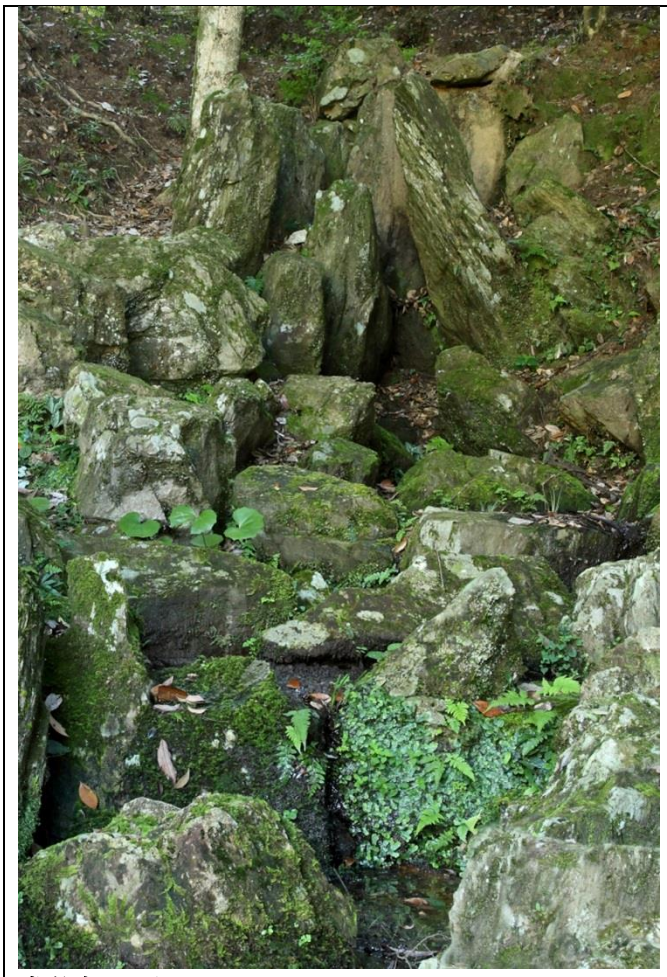
天龍寺：龍門瀑石組み



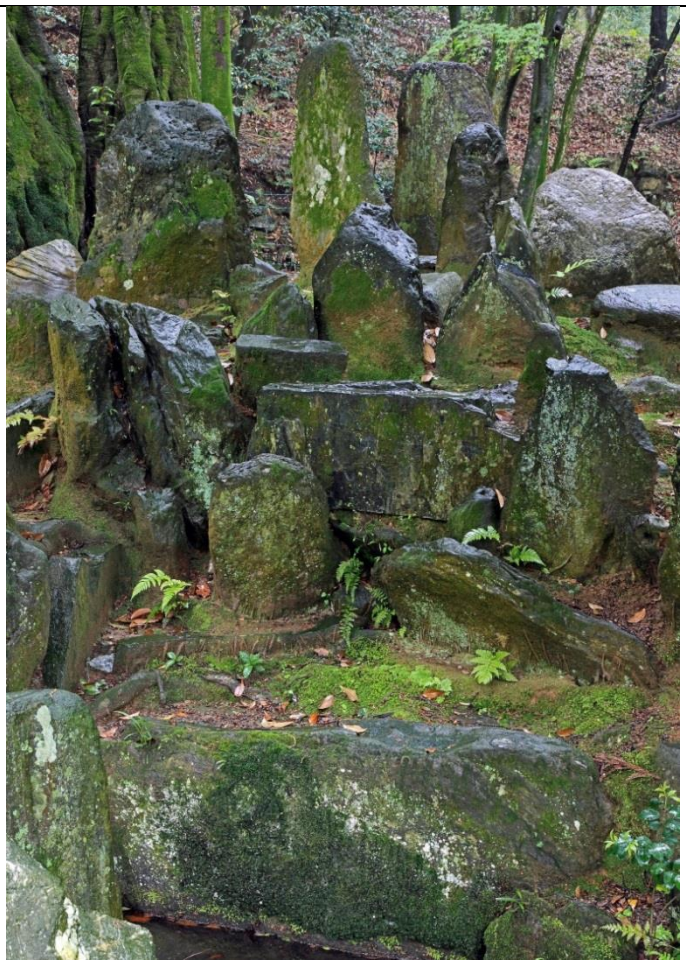
金閣寺：葦原島は総て巨石で覆われている。葦原島は義満時代に作ったのであるが、巨大な島を巨石で覆い尽くした。特に画面右側には三尊石が組まれているが、金閣から眺めるための造形である。

金閣寺：金閣と対峙する大きさの三尊石

銀閣寺：上部石組み【左下は鯉魚石（斉藤忠一氏説）】



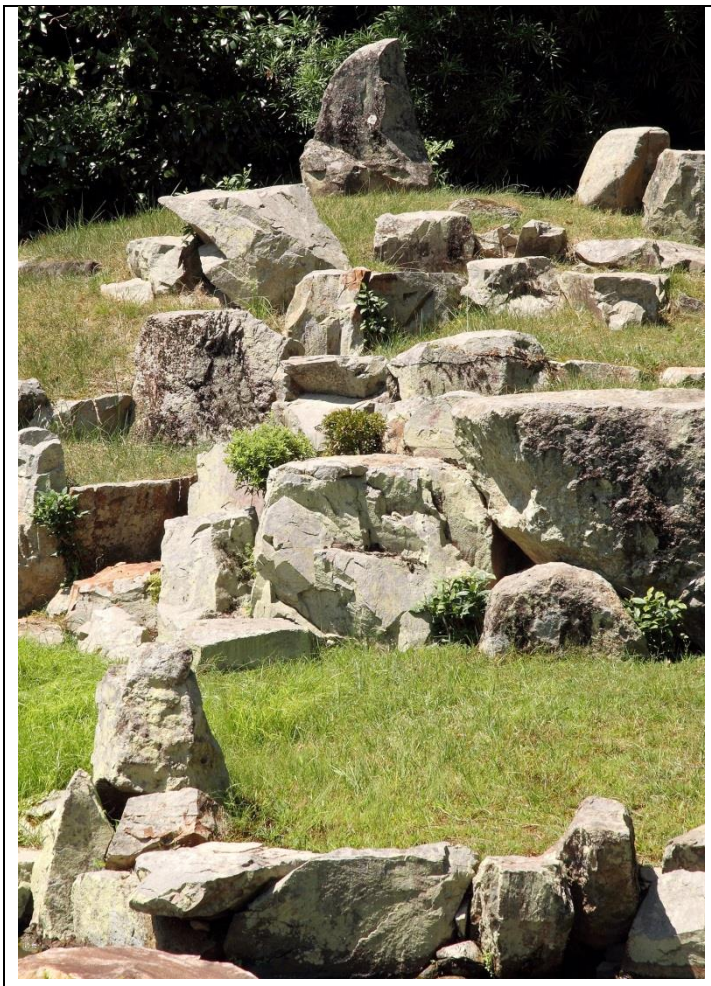
常栄寺：V 字型の地形に 7 段 20m の壮大な龍門瀑



保国寺：立石群の中にある２石の長方形の石が光る

常栄寺：山畔の回遊路は雪舟の水墨画にも出てくる消え入る山道。庫裏から見ると煙霧に霞む山並みに見える。

普賢寺：左側の巨石と右側の鯉魚石により中央の枯滝に視線が向かう。平庭式の龍門瀑は珍しい。



万福寺：鋭い稜線の石のみによる激しい造形

医光寺：垂直に近い枯滝は前代未聞

大仙院：代表的枯山水の庭は水墨画の写しか

酬恩庵：巨石で覆われた迫力ある龍門瀑

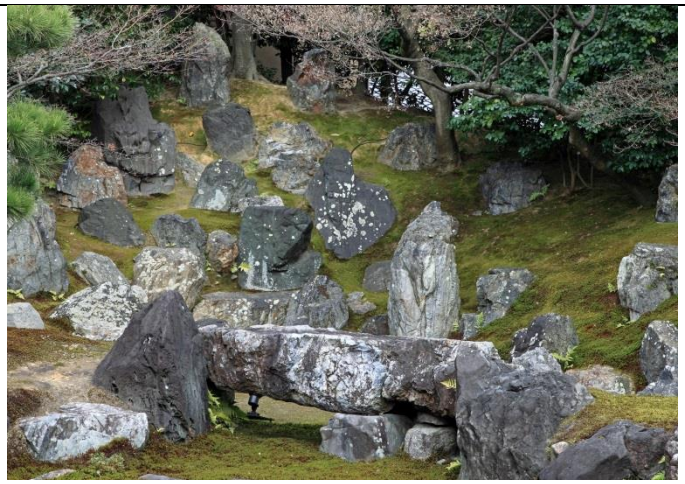
京極家庭園跡：この一石で戦国武将の気迫を示す

旧秀隣寺：要所々に鋭い立石が緊張を生む

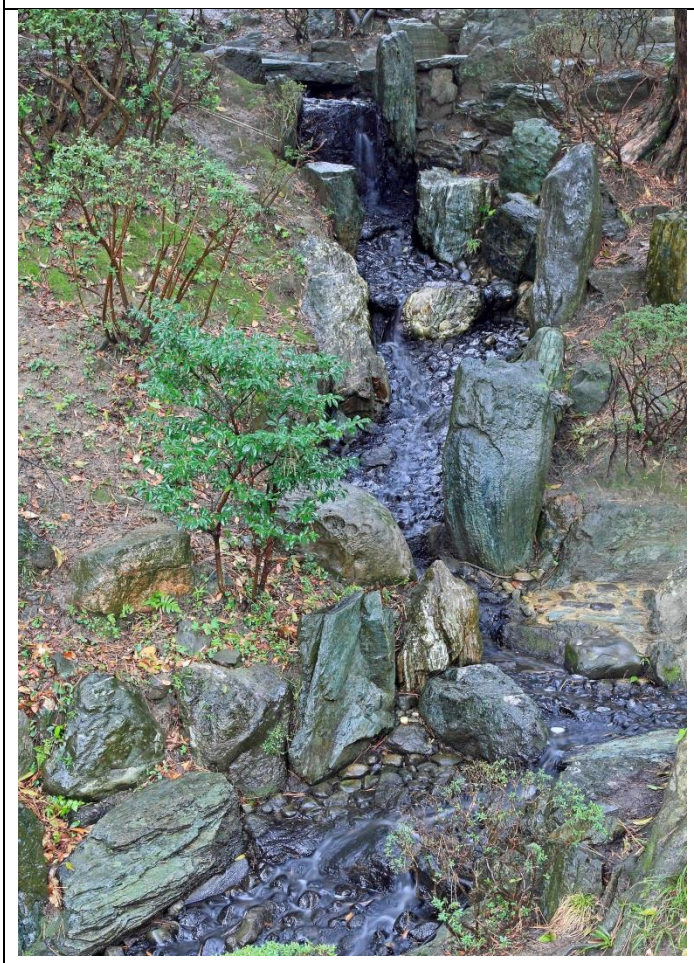
北畠神社：螺旋形の中心に須弥山石が立つ

諏訪館跡：分厚い石橋と堅固な石組みが戦国時代の緊張を示す

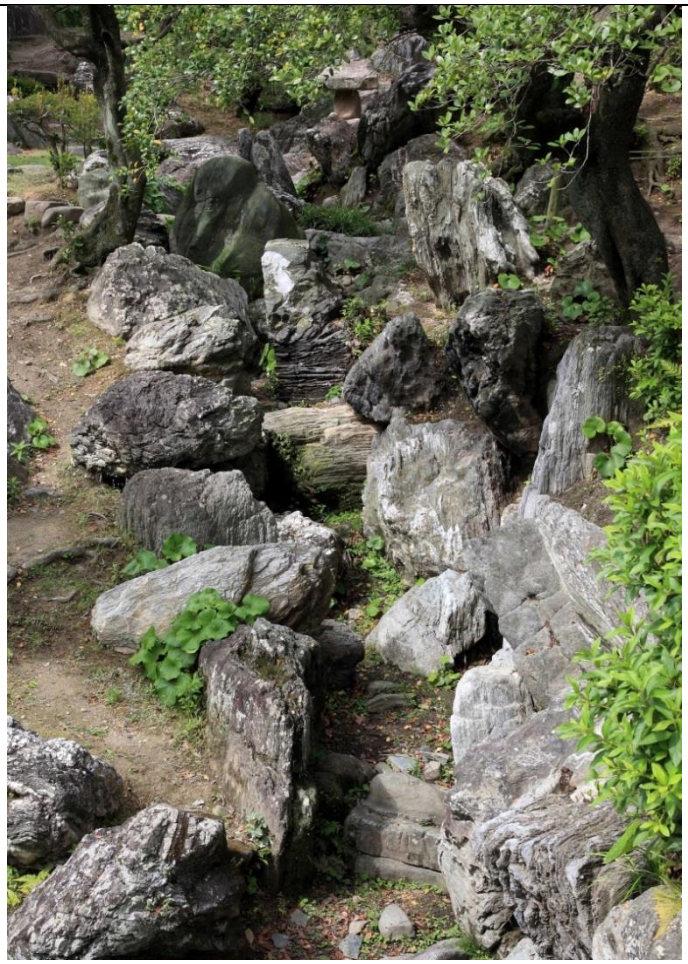
西本願寺：小さい築山への石組みは立体造形の効果絶大



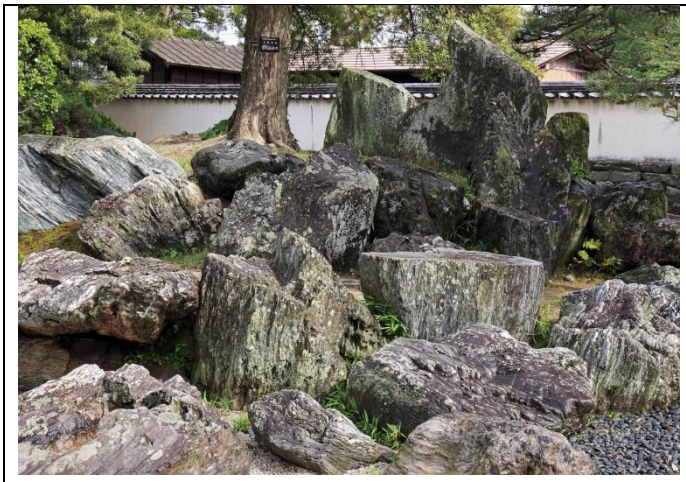
円徳院：小さな築山でも散在した石組みの面白さを発揮する



和歌山城：上田宗箇の垂直に近い生得の滝。

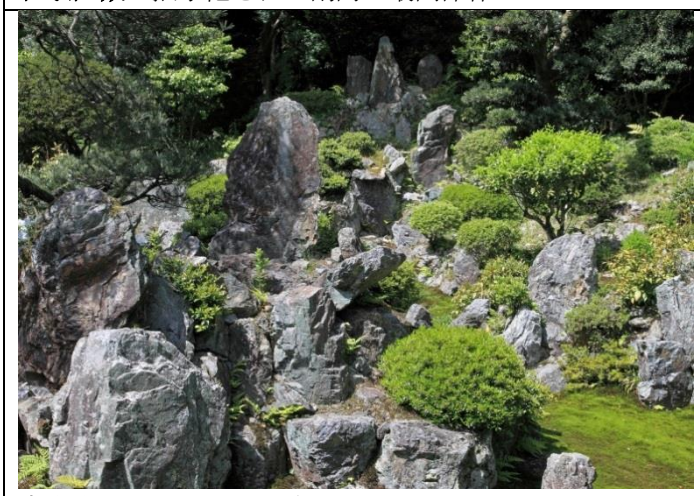


徳島城：上田宗箇の豪華極まりない枯滝



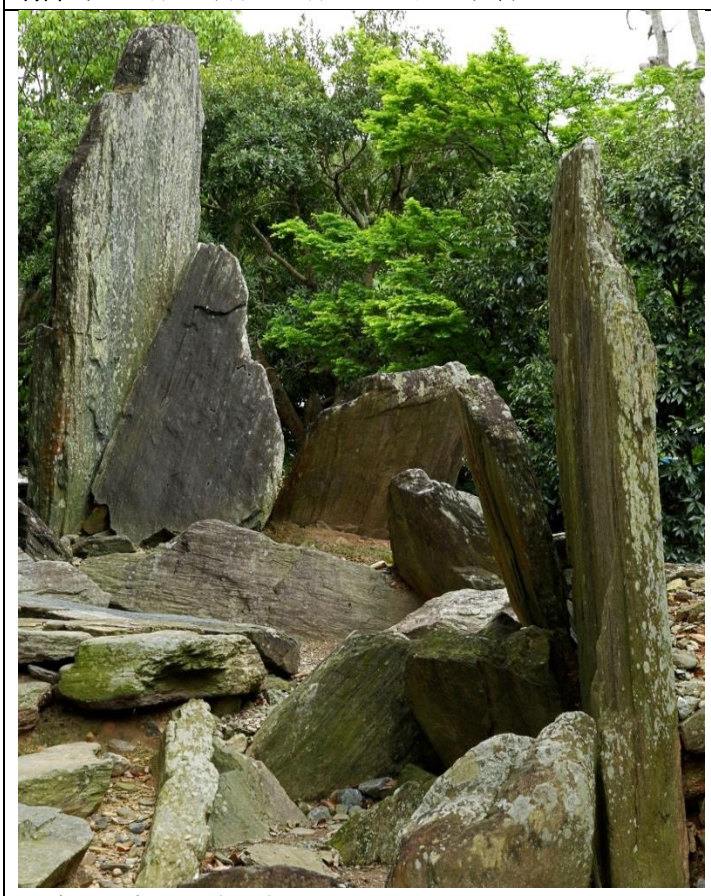
和歌山城：抽象化された鶴島の最高傑作

名古屋城：「石橋」の世界に我々を誘う

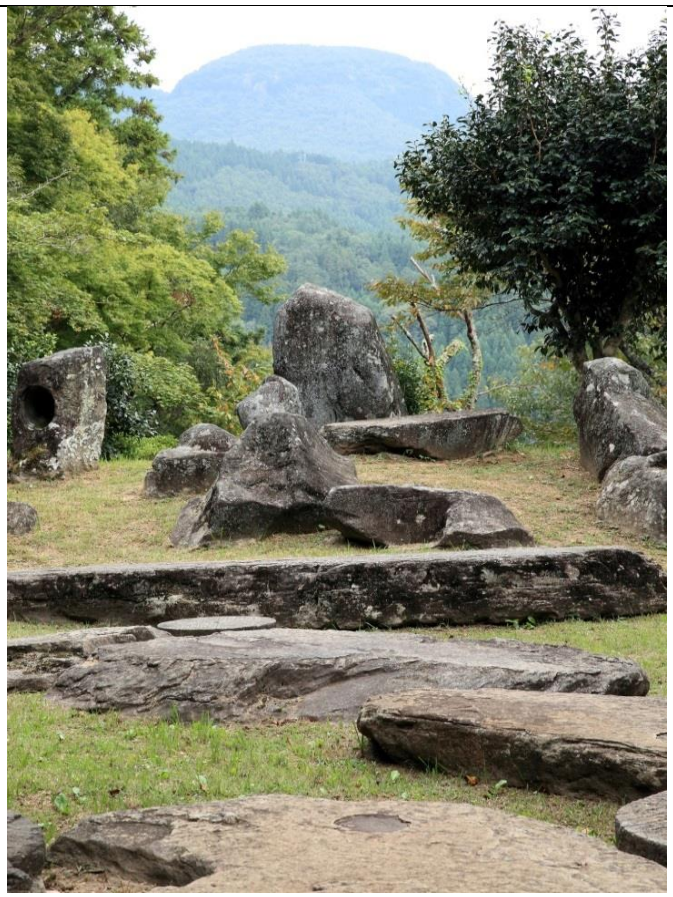


青岸寺：近景・中景・遠景の水墨画の影響か

粉河寺：鶴亀蓬莱の庭に虚空に架かる石橋は水墨画の影響



阿波国分寺：稜線の青石による乱舞の原点は



久留島家：聖なる山の前に抽象的配石の枯山水

玄宮園：巨石が池中・護岸・島中・護岸に独立した形で配置されている。抽象庭園の極み（ただし松や楓の選定必要）

久留島家：江戸の最末期に九州の山奥の森藩の庭園だ。個々の石は各々独立しているが、全体として調和が取れている。まさに抽象枯山水の頂点に立つ庭園ではなかろうか。前頁の下段右に示したように背後には西山があり借景庭園の傑作。